



2013年9月25日放送

印象に残る症例②

ひのクリニック 院長 日野 篤

こんにちは。愛知県一宮市にあります、ひのクリニックの日野と申します。「印象に残った症例」という題目でお話をさせて頂く企画の第2回目です。漢方医学の特徴である脾の概念を利用して有効であった症例を紹介させて頂いております。脾とは五行論での概念で消化吸収機能のことです。前は「冷え、低体温」の症例でしたが、今回は「頭痛、腰痛」です。こんな訴えでも脾の異常を正すことで改善に導けることもあるのです。

症例は50才女性。1ヶ月以上続く頭痛と腰痛を主訴に来院されました。痛みは起床時や夕方に強く、日常生活にも支障があるほどです。1日中就労しており、同一姿勢が長時間続くようです。ただ、休みの日にも痛みが出現することから、仕事との関連は考えにくい状況でした。鎮痛薬の効果は一時的でしかなく、漢方薬治療を希望されました。

診察時の所見です。外観は長身で痩せ型、色白でやや肝斑が目立ちます。会話も明瞭で、凜としたキャリアウーマンと言った印象です。1年前に閉経しましたが、やや汗が多い程度でホットフラッシュや不眠、イライラなどの更年期症候群様の症状はありません。ただ、しばしば眼瞼痙攣が出現することを聞き出せました。理学所見上、頰椎や腰椎の可動域制限、上肢下肢の神経学的異常は認めませんでした。レントゲン検査では第2第3腰椎に軽度変性が見られましたがストレートネックは見られませんでした。

漢方医学的所見です。腹診では右胸脇苦満、臍上悸、右下腹部に瘀血の圧痛点があり、

心下痞硬や胃内停水は見られませんでした。舌診では歯圧痕あり、舌下静脈怒張なし。脈診は施行していません。

以上から、気鬱、瘀血、水毒と気・血・水全ての異常が見て取れ、まずは理気、駆瘀血作用のある桂枝茯苓丸と、鎮痙作用のある芍薬甘草湯を頓服使用することとしました。2週間の服用であまり変化はなく、今度は桂枝茯苓丸合呉茱萸湯とし、水毒にも配慮できるような組み合わせにしましたが、これもあまり効果がなく、ついには腰痛が下肢にも放散してくるようになりました。そこで今度は疎経活血湯に変方し何度かブロック注射も施行しました。何とか腰痛は改善傾向でしたが無くなったわけでもなく、頭痛の方は相変わらずでした。あまり注射を重ねるのも気が進まなかったため、改めてじっくり問診をとったところ、実はかなりの便秘症であることが判明しました。もう何年も市販薬を常用して便通は問題なかったのだから「便秘なし」と答えていたそうです。ここで方向転換し、便通異常に焦点を当てることにしました。腹診上、瘀血の圧痛点はまだありましたから通導散を使用したところ、頭痛が一気に軽減しました。

ここまで来るのに2ヶ月以上費やしてしまいましたが、その後は便通コントロールに腐心することになりました。しばらくは通導散で痛みのコントロールも良かったのですが、秋から冬にかけて乾燥して冷え込んでくると、便通が悪化しそれに伴い頭痛や腰痛も再発するようになったのです。ここで有効だったのが潤腸湯です。現在も通導散と潤腸湯を季節変化や環境変化に合わせて使い分けることで、痛みのコントロールをしています。

さて、本症例を考察してみます。頭痛や肩こり、腰痛など慢性の疼痛性疾患で悩まれている方は非常に多いです。患者さんの数が多ければそれだけ症状も多様化するものですが、西洋医学的治療では実はあまり選択肢がありません。頻用される消炎鎮痛剤はその名通り「抗炎症剤」ですから炎症が強い病態には効果的ですが、慢性化しあまり炎症所見が目立たない場合は効果が期待できないか無力であります。そう考えますと、痛みの裏に潜む原因にアプローチできる漢方薬は、非常に有効な手段になり得ると思います。

そこで、処方選択に漢方医学的所見が重要になるわけですが、本例では腹診で胸脇苦満や臍上悸と言った「気」の異常が見られ、瘀血の圧痛点があるので「血」の異常もあり、舌診での歯圧痕は「水」の異常を示唆しています。要は「所見だらけ」でどこから攻めるべきか迷います。セオリー上、気血水全ての異常が見られる時には「気」から攻めるべきなのですが、疼痛性疾患にはすべからず瘀血が絡む、という言葉もあるくらいで、疼痛が主訴の本例では「気」「血」を守備範囲とする桂枝茯苓丸と直近の痛み緩和のために芍薬甘草湯を選択したのです。

しかしながらこの処方効果はなく、次に「水」に配慮しつつ、鎮痛効果の高い呉茱萸を含んだ呉茱萸湯と桂枝茯苓丸にしてみました。残念ながらこれも無効でした。そのうち下肢痛も出現したため病名投与的に疎経活血湯に変方し、ブロック注射も行ったところ、腰痛に関しては軽減傾向となりましたが頭痛は不変。やはり「気」の異常に特化した処方

を優先すべきかと考えました。具体的には抑肝散や半夏厚朴湯です。そちらに変方しようとした矢先、実は長期にわたり下剤を服用していることを知ったのです。

ここで瀉下作用と駆瘀血作用のある通導散を選択したところ、腰痛だけでなく頭痛まで一気に改善したのです。単純な下剤では当然鎮痛効果はなく、漢方薬の下剤を使用することで鎮痛効果を得たわけで、これは大変興味深いことです。

さらに季節が秋冬になり乾燥傾向になったところで再度症状が悪化し、ここで滋潤作用のある潤腸湯に変方したところ、症状が軽快したのです。季節や環境に合わせて処方を変化させるという漢方薬の妙を体感することができました。

瀉下作用のある漢方薬は数多く存在します。一般的に大黄、芒硝という生薬を含むものが漢方での下剤ですが、それらに様々な生薬が追加されることにより幾多のバリエーションが生まれ、処方の性格が決まっています。本症例で使用した通導散と潤腸湯は下剤の基本生薬に「血」の異常を正す生薬を追加したものです。「血」の異常には瘀血と血虚がありますが、通導散が瘀血用、潤腸湯が血虚用と考えると分かり易いと思います。瘀血の便秘に対する漢方薬は他にもありますが、血虚の便秘に対する処方潤腸湯のみなので、比較的血虚が多い日本人にとっては大変有益な処方ではないかと思えます。

東洋医学の古典には「通じれば即ち痛まず、通じざれば即ち痛む。」という言葉があります。痛みの裏には往々にして「流れが滞る」ことが隠れています。その象徴たるものが便秘です。逆に言うと高度の便秘がある方には、何かしらの痛みが潜んでいる可能性があるわけですね。ただ、一般的な下剤で消痛効果が得られることはまずありません。漢方薬の特徴は下剤成分に生薬が追加されていることです。ここにこそ漢方薬の下剤で消痛効果が得られる理由があるのでしょう。痛みにはすべからず瘀血が関与する、通じれば即ち痛まず、この2つのキーワードを重ねると通導散や潤腸湯のような漢方薬は下剤と捉えるよりも「血流を良くして痛みを改善する薬」として認識すると応用範囲が広がると思えます。